

国内で初めて確認された園芸作物の新病虫害（平成7年～平成11年）

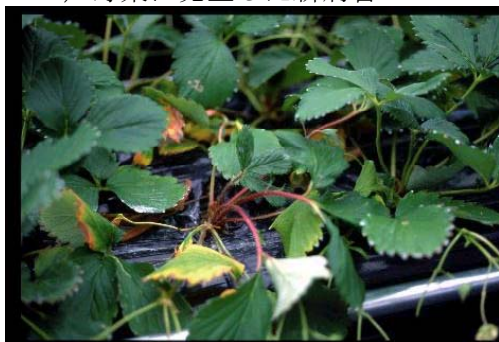
園芸試験場

1 取り上げた理由

宮城県内の野菜1作物（イチゴ）と果樹4作物（セイヨウナシ、モモ、ウメおよびアンズ）に、原因不明の5種類の病害が発生した。病原菌の同定を行ったところいずれも、国内で未発生の病害であることが判明したので参考資料とする。

2 参考資料

1) 野菜に発生した新病害



萎凋症状



わい化症状



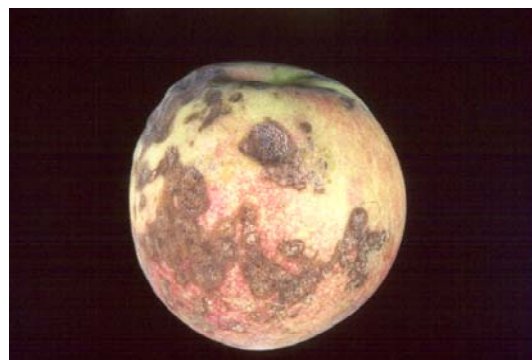
根部病徴

a イチゴ根腐萎凋病※< *Cylindrocarpon destructans* >

2) 果樹に発生した新病害（いずれも新しいタイプの炭疽病菌< *Colletotrichum acutatum* >）



b セイヨウナシ炭疽病（病原菌追加）



c モモ炭疽病（病原菌追加）



d ウメ炭疽病（病原菌追加）



e アンズ炭疽病（病原菌追加）

（問い合わせ先：園芸試験場環境部 電話022-383-8132）

3 利活用の留意点

- 1) 表-1, 表-2を参照
- 2) ※新規病害を命名する場合, 学会, 研究会等に発表し, 論文または講演要旨として掲載後に日本植物病理学会「日本有用植物病名委員会」に申請する。審査後に日本植物病理学会報の病名目録に掲載されるまでは, 正式に病名として認知されないため仮称として取り扱われる。

4 背景となった主要な試験研究

- 1) 研究課題名及び研究期間 高収益養液栽培技術の確立 平成10年～12年
地域農業改良普及センター及び農家等からの病株の持ち込み診断依頼
平成8年～11年

2) 参考データ

表-1 野菜に発生した新病害

	病名	発生時期	病徴	留意点
a	イチゴ根腐萎凋病 (H10～H11) <養液栽培で発生>	収穫初期～ 収穫終了時	萎凋症状とわい化症状の2種類の症状があり, 根はいずれも褐～黒色に変色し新根の発生が無い。萎凋症状: 初め下位葉が黄化萎凋後, 葉全体の光沢が無くなる。晴天時は株全体が萎凋し, 朝夕曇天時は回復するが後に枯死する。わい化症状: 草丈が短小で葉が小さく下位葉は黄化する。果柄の発生は少なくなり果実の肥大は抑制される。	本病は, 株に負担がかかる収穫時期, 高温や多灌水状況で発生が多く被害が出やすい。 対策は健全苗の定植, 排水管理, 温度管理に十分気を注意する。

表-2 果樹に発生した新病害

	病名	発生部位	病徴	留意点
b	セイヨウナシ炭疽病 (H10)	果実(樹上～ 収穫後) 葉にも発生 (接種試験)	初め褐色の小斑点後, 徐々に拡大し中央部が陥没した円形～不整形となる。病斑部の表面は, 同心円上に鮭肉色の分生子塊が形成される。追熟中の果実では, 樹上での果実よりも分生子塊が多量に形成される。	左記の4病害の病原菌は, 炭疽病の中でも近年新たに確認された, 新しい病原菌である。従来報告のある炭疽病とほぼ同じ程度の多犯性病害のため, 防除を実施する際は, 周辺の園芸作物へも同時に防除を行う。 各果樹の炭疽病に登録のある薬剤に対して効果がある。
c	モモ炭疽病 (H10)	果実(生育中 期～後期) 葉にも発生 (接種試験)	初め灰白色～黄褐色に変色後褐色となり, 中央部がやや陥没し鮭肉色分生子塊が表面に形成される。病斑部は後に融合し拡大し, 中心部から裂開する。	
d	ウメ炭疽病 (H7)	葉: 展葉期～ 落葉期(生育 中～後期に 発生しやすい)	初め白色の小斑点が生じ, 病斑部は次第に拡大し円形～不整形, 中央部が白色～褐色で黒色の小粒点が同心円上に形成し周縁部は暗紫色となる。病斑部は, 主に葉先や葉縁部に多く, 後に融合して拡大する。乾燥すると中心部から裂開する。	
e	アンズ炭疽病 (H10)	果実にも発生 (接種試験)		

3) 発表論文等

- a : 平成12年度日本植物病理学会大会発表
- b : 平成11年度日本植物病理学会大会発表 (日本植物病理学会報 第65巻 第3号 P407-408(講要))
- c : 平成11年度日本植物病理学会大会発表 (日本植物病理学会報 第65巻 第3号 P407-408(講要))
- d : 平成11年度日本植物病理学会大会発表 (日本植物病理学会報 第65巻 第3号 P407-408(講要))
平成11年度日本植物病理学会東北部会発表 (日本植物病理学会報 第65巻 第6号 P661-662(講要))
- e : 平成11年度日本植物病理学会大会発表 (日本植物病理学会報 第65巻 第3号 P407-408(講要))